

不果志の運命、

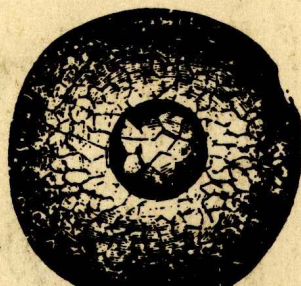
あるいは

高橋和巳についての

断片的な考察

川西政明

講談社



不果志の運命

© Masaki KAWANISHI
Printed in Japan 1974

あるいは

高橋和巳についての

初版発行
昭和四九年六月八日

断片的な考察

川西政明 講談社

造本—杉浦康平+鈴木一誌

発行者—野間省一

発行所—株式会社講談社 東京都文京区音羽〒112 電話東京(三)四三二二(大代表) 郵便東京九九〇

印刷所—三協美術印刷株式会社 製本所—大村製本株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたしません

定価はカバーに表示してあります(文一)

序

——ジャイナ教をめぐる——

埴谷雄高

私は、これまで屢々、私達は先行する文学者の作品を読むことによって文学者となると書いてきたけれども、ただに文学作品についてばかりではなく、或る文章のなかにある僅か一つの言葉、一つの事象にさながら生涯最初の発見のごとくに不意とうたれることが機縁、端緒となって、そのひとの一生の方向までが規定されてしまうといったことも存するのである。恐らく、私と高橋和巳におけるジャイナ教との思わざる出会いがそうした一事例である。

昭和七年五月十五日、私は豊多摩刑務所へ送られたが、鉄格子のはまった高い小さな窓から青空が眺めあげられる独房に何ら為すこともなく坐っていると、夕

刻、刑務所の高いコンクリート塀の向うに号外の鈴の音が聞えた。五・一五事件の日なのであった。

それから約一年半つづくことになったその独房生活では、夏でも冬でも午後七時になると、一枚だけの畳の上に布団を敷いて寝なければならなかったが、その頃からすでに不眠症の気味のあった私は、まだ高窓のそとに暮れきれぬ青空が眺めあげられる夏の夕刻など特に、眠れぬままに、寢床のなかでさまざまな種類の妄想に耽りつづけ、そして、それらの妄想のなかに『死霊』の遠い原型もあったのである。けれども、毎夜思い描くその未決時代の妄想のなかの人物、思想、筋道などの総体は、いわば一匹の小さな蠅が透明な硝子窓のこちら側にとまって外の世界を覗き眺めているような漠とした、荒い、薄暗い網の目状の輪廓を示しているだけで、いってみれば、頭のなかの作品としてもまだ安定していなかったのである。

刑務所から出たあとの私は、これまた何らなすこともないままにデモイロギイといった類にのめりこんでいたが、その頃の或るとき、九段下の大橋図書館で世界聖典全集のなかの『耆那教聖典』を偶然読みはじめると、不意に、それまで思わぬあぐねていた『死霊』の中心となるべき根本観念がきまったのであった。そこででてくる実在の大雄を「私流に」勝手につくりかえて何人も対抗し得ざる窮極

的な全否定者として仕立てあげ、そして、全肯定者としての釈迦と対置するといふ構図が私に思い浮んだのである。私にとっては、そのとき暗い脳裡に思い浮んだ一つのヴィジョンがまた同時に一つの思想でもあったが、この「私の」大雄は暗い頭蓋の奥でとめどなく生きつづけることになったのである。

そして、それが、戦後、高橋和巳へ伝えられる前に、まったく違った伝達のかたちをもたれたのは、昭和十四年、「構想」という同人雑誌に私も加って平野謙と相知ったときである。私達が最初に会ったときは、これまでもに書いていくごとく、私達二人とも一種の情熱に駆られながら、共産党内のリンチ事件について話しあい、そこからまたドストエフスキイの『悪霊』にも同じ情熱をもって触れたのであった。

ところで、それから数日後、本郷の通りを歩いていた私は、向うから歩いてくる平野謙と偶然会ったのであった。その頃、彼は一度はやめていた東大に復学していたのであったが、喫茶店白十字の二階へあがった私達は自然の成りゆきとして文学的雑談をはじめ、そして、その裡に、私の暗い頭蓋のなかだけにある一つのプランにすぎない釈迦と大雄との対話について私は話しはじめたのであった。あとで思い返すと、僅か二回目の出会いなのに、いささか大げさにいえば「回復不能な熱病」にでもうかされるように、本郷の白十字の二階でそれを話しはじめ

た私と彼の対座のさまは、広場の「都」という料理屋で大審問官の話をするイワンとアリョーシャの対座のかたちを想い出させたが、しかし、「残念なことに」、或いは、「極めて当然なことに」、そのときの平野謙はアリョーシャと違って、私を「訳のわからぬ」ことばかり考えている奇妙な男として一種の驚きを示したものの、リンチ事件や『悪霊』の話題ほどには深い共感は覚えなかったのである。いささかユーモラスにいつて、白十字の二階において現実密着と架空凝視との婚姻をまずはかったこの対話を、私達のジャイナ教の前史とすると、戦後における私と高橋和巳との出会いは、「日本ジャイナ教の後史」といわねばならない。

そのときの高橋和巳は、『死霊』の序文のなかに耆那教と大雄の名を見たとき、「ただその数行だけから」、いつてみれば、一生の課題を重く背負わされたごとくに深く触発されたのである。けれども、平野謙と私の文学的姿勢ほど両極に向ってかけ離れていないにせよ、高橋和巳と私の文学的姿勢もまたいささか異なっているのであった。

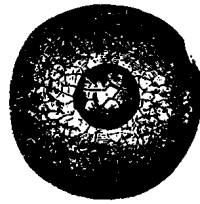
私は現実の耆那教に接したとき、私自身の思想的課題に応じて大雄を私流に「架空」なかたちへつくりかえることだけに専念したけれども、高橋和巳は私の序文のなかの耆那教からインドに実在するジャイナ教の歴史へ戻ってその「現実」のかたちの仔細を克明に調べはじめたのであった。私の精神的姿勢がひたすら妄

想的、現実の向うへ数歩でも踏みでようとする非現実志向をもっているのに対して、高橋和巳のそれは、学問的で、そして、彼自らが「還行」と名づけたところの生々しい現実性を帯びたものにほかならなかったのである。

高橋和巳と私のあいだのこうした差異は私達の作品を読むひとびとには直ちに感得されるであろうが、ちょうど極度に対照的な平野謙と私の間柄が却って仲がよいことを見習うごとく、高橋和巳と私のあいだも、その文学的姿勢の差、年齢の差にもかかわらず、親密であった。

その高橋和巳の長いあいだにわたる担当編集者であった川西政明君はただに高橋和巳の文学のみならず、その生活の表裏の殆んどすべてを見知っているが、そのような文学と生活にわたる全体を知悉している川西政明君のこの書が、高橋和巳研究の裡、容易に得難い独特の深さの位置を占めることは論を俟たない。高橋和巳に最も親しかったもののたてる記念碑としてこの書が川西政明君によって書かれたことを、私は心底から喜ぶものである。

川西政明 講談社



不果志の運命、
あるいは

品橋和巳についての
断片的な考察

序——埴谷雄高——II

哀辞——5

観念と想像力——9

断章——K——89

人間と人間の関係

人間と社会の関係——99

废墟から废墟へ——203

高橋和巳年譜・全作品書誌的解題・参考文献一覧——224

後記——276

哀辭

『耆那教聖典』(鈴木重信訳、世界聖典全集、昭和五年、改造社)を開くと、最初の頁に次のような言葉がある。

衆生の犯せる罪を憐みて、瞳の星光りにぶく、そぞろ涙にかきくれし、吉祥勇グワイラジナ 勝の眼にさちはひあれ。

次に、高橋和巳の『邪宗門』にこの言葉から感応されたと思える哀悼の文字が記されてあるのをわれわれは知る。

衆生の犯せる罪をあわれみて、瞳にぶく、そぞろ涙かきくれし死者の眼に睡りあれ
怒りも歎きもなく、沈黙せる唇に柔かき綿を含み、乳呑児のごと大地に抱かれて睡れ

教団の最高顧問、加地基博の死に対して捧げられたこの哀辭は、すでに高橋和巳自身の世界の言葉となっており、高橋和巳にとっての〈死〉というもののイメージを喚起させねばおかないものとなっている。

さらにこうも言う。

《死は、そのことを特別重大なことと意識せぬへ永遠の睡り》であるべきなのだ。そしてやがて世界全体もまた全体としてその永遠の睡りにつくことこそが……。だがそれがありえぬ今はむしろ、苦しい思いが美しい歌を産むように、苦しみからの死がかえって神の心に近い。理想は睡るがごとき婦土、だがそれが望みえぬ現在には、もっとも苦しめる者の死こそが次善のものだと、教団ではみなす。

最も絶望的な詩、それは最も美しき詩

最も苦惱せる死、それは最も美しき死

人は絶望の、暗黒の、闇を凝視めて、かっと口張裂けて死ぬ。呪咀がこもるゆえに人は一回限りの生に悪魔的な思惟を被せる。苦渋に満ちた死が花園に横たわる平安の死への願望を打ちくだき、糞尿にまみれた死のイメージを重ねる。

高橋和巳が偏愛した晩唐の詩人李商隱に「劉蕡を哭す」と題した詩がある。

上帝深宮閉九閨

上帝の深宮は九閨を閉ざし

巫咸不下問銜冤

巫咸は下りて銜冤を問わず

黃陵別後春濤隔

黃陵に別れて後 春濤に隔てられ

滄浦書來秋雨翻

滄浦に書來りて 秋雨翻る

只有安仁能作詠

只だ安仁の能く詠を作す有り

何曾宋玉解招魂

何ぞ曾つて宋玉の解く魂を招く

平生風義兼師友

平生 風義は師友を兼ねたり

不敢同君哭寢門

敢て君を寢門に哭するに同じくせず

天の神はその奥深い天宮において、九つの門をかたく閉ざしたまま、地上のことを明察したまわぬ。罪なき罪に流謫された者を救うという巫咸も、天より下って君が冤罪をうけた事の次第を問い正しはしなかった。

かつて湘潭の地に相いまみえ、また春に君と別れてからは、湘江の波濤にへだてられ、

互に消息を通じあうこともできなかった。そしてまだ一年にもならぬこの秋に、湓浦に手紙が来て君の死が報ぜられた。秋の雨が風にひるがえり、江に水みなぎって寂しいこの秋に。

かの西晉の世の秀れた感傷詩人潘岳だけが、この悲しみをよく誄文に綴りうるだろう。だがしかし、どんな文章が君の事蹟をたたえようと、とこしえに消えた人の魂を、再びは呼びもどせない。宋玉は屈原の魂を招くことができなかつたし、いま私が宋玉をまねたところで、君はもう帰ってはこないのだ。

君ありし日のつね日頃、君の高い道義は、理解し合う友たるとともに、それを超えて、師として私の尊敬するところだった。それゆえに、寢門の外に哭する朋友の礼に従う気にはなれぬ。私は私の師として、居室において厚く君をとむらいたいと思う。(岩波書店刊、中

国詩人選集『李商隱』高橋和巳訳)

私の好きな詩である。

觀念學と想像力

高橋和巳が耆那教（ジャイナ教）に触れたのは、埴谷雄高が『死霊』自序で釈迦とジャイナ教祖大雄との対話を予告したのを読んだのを端緒とする。

濃緑の紙クロス装の『死霊』が真善美社から刊行されたのが昭和二十三年十月、高橋和巳が一年間だけいた旧制松江高等学校から新制京都大学文学部の第一期生として入学したのが昭和二十四年夏のことであった。『死霊』を夢中で読んだのはこの頃、部屋の後部を三階への階段がでっぱり走っている三畳の屋根裏部屋に下宿していた、そんな時だろう。

埴谷雄高が予告した釈迦と大雄の対話のヴィジョンとは次のようなものであった。

「嘗て耆那教の聖典に接したとき、私には一つの奇妙なヴィジョンが浮んだ。耆那教とは印度古来より現在までもひきつづいている戒律酷しい一教団であって、嘗て私が述べるような事実など存しなかったが、私は私自身の法則に従ってその素朴な教儀を私流の領域へまで極端化してみたのである。そのとき浮び上ってきたヴィジョンとはこうである。その教団はその頃餓死教団といわれていた。着ること飲むこと食うことはおろか呼吸すらその